# 手紙

成瀬中学校　前村　美波

私の曽祖父は、１９４５年の２月２４日に、フィリピンで戦死した。

私がそれを知ったのは、一昨年の夏のことだった。真夏の暑い日に私と二人の弟は祖父母の家で世話になっていた。太陽が真上にくる昼頃、私は一人和室で宿題をしていた。すると襖の向こうから静かに何か聞こえる。テレビの音でも、にぎやかな談笑でもない。それは泣き声だった。ぐっと声を殺して泣いているからか、ほんの少し苦しそうに聞こえる。そっと襖を開けてのぞくと、祖父が泣いていた。ペンで何かを書きながら静かに涙を流している。彼には何度も会っているが、泣く姿を見たのはそれが初めてだった。だから何か大変な事があったのかと思って、祖母に訳を聞くと、祖母は少し眉を下げながら言った。

「ひいおじいちゃんの手紙を読んでいるの。」

私からしたひいおじいちゃん、つまり祖父からすると父にあたる人からの手紙だった。

「なんで今読んでるの？ 」

「あなた達もだいぶ大きくなったから、読ませておこうと思ってね。」

「遺書か何か？ 」

祖母はしばらく黙って、小さく息を吸い、つぶやいた。

「ひいおじいちゃんが戦争で死ぬ前に送った最後の手紙なの。」

一瞬、時間が止まったように思えた。庭ではしゃぐ弟の声も、空に流れる真っ白な雲も、全部私に届かなくなったようだった。曽祖父の顔は、遺影でしか見たことがなかった。どんな人だったとか、どうして亡くなったのかとか、知らなかったし、知ろうともしてこなかった。

「そうなんだ… … 。」

私はふらふらと廊下を歩き和室へ戻った。その後、宿題はまったく手につかなかった。

しばらくして、祖母に呼ばれて居間へ入ると、祖母は３枚の紙を私に渡した。その

うち１枚はひどく汚れて、走り書きで何か書いてあるが、所々しか読めない。もう２枚は白くきれいな紙に、祖父の字で丁寧に文が書いてある。

「美波でも読めるように、おじいちゃんが書き写してくれたから、読んでみて。」

紙を受けとると、ただの紙のはずなのに、その時はとても重く感じられた。受け取ってからしばらく、読む気になれなかった。戦争はずっと昔のことだと思っていた。もっと自分から遠いことだと。けれど、そうではない。もっと知らなくてはいけない。そう勇気を出して、私は手紙を読んだ。手紙には、こんな事が書いてあった。まず、曽祖父の妻、私の曽祖母のチヨさんへの事、次に、出征する港である門司港までの道のりの事、最後に、彼の母へ向けた想いが書いてあった。最後の一文には、「自分もお国の為に一身をつくす覚悟で居ります。お母様。」と

書いてあった。国のために身を捧げるなんて、小説や映画の中だけだと思っていた。また、手紙には「又便りをする」とあった。しかし、その「又」はやってこなかったのである。戦争は、私の身近にいたんだ。気がつくと、私は泣いていた。私は居間に入って、祖父にいろんなことを教えてもらった。まだ祖父が２歳の時、私の曽祖父である武男さんは福岡の門司からフィリピンへ向かって、昭和２０年に亡くなった。しかし、武男さんの家族にその知らせがきたのは、武男さんの死から３年も経ってからだったそうだ。すると祖父はおもむろに１枚の紙を取り出して私に見せた。そこには「死亡告知書」と書かれている。

「家に届いたのは、この紙１枚と、フィリピンの海の砂だけだったんだ。」

細かな死因も教えてもらえず、遺書も遺骨も届かなかったんだそうだ。祖父があんまり悲しそうに言うものだから、私も涙をこらえきれず、一緒に泣いた。

　２年経った今はこう思う。人の死を、命を軽くしてはいけない。一人の人間の死を、あんな紙１枚にしてなるものか。第二次世界大戦について調べると、戦死した方の人数が出てくるが、その何百、何千万人の中に、私の曽祖父がいる。いるのに、大きな数に埋もれて見えないのだ。人の死を数字で表してよい訳がない。あたり前だが、その中の一人ひとりは生きていたのだから。その人にもきっと、大切な人がいて、帰る

家があったのだ。泣いて、笑って、怒った人生があったはずなんだ。それを数字にする戦争は恐ろしい。戦争はいつも私達の傍で、人の命を軽くするチャンスをうかがっている。それを防ぎ、平和を守るために何をすべきか、何ができるか。これから未来へ向かう私達が、過去を学び、二度と同じ過ちを繰り返さないために、考えていかなくてはならないのだ。